

第 24 回東川賞審査講評

海外作家賞 クラウス・ミッテルドルフ (Klaus MITTERUDORUFU)
国内作家賞 檜橋朝子 (Asako NARAHASHI)
新人作家賞 澤田知子 (Tomoko SAWADA)
特別賞 小畑雄嗣 (Yuji OBATA)

2008 年の今日、世界の中でもとりわけアジア各地で写真祭が開催されるようになった。その流行は写真が担う社会性と芸術性の両翼によって幅広く大衆に働きかける力を示している。それは昨今のアジア諸国の発展とも密接に関連して勢いがある。24 年にわたる先達として我が東川賞の運営もすでにじっくりと定着し独特な個性をもった写真賞として認知されている。その選考に関わる身としての責任を痛感し今後のさらなる展開を夢見る。

その東川賞の審査委員会に本年度に大きな入れ替わりがあった。先ずはその報告をしておきたい。当初からの監事委員であった平木収氏、そして筑紫哲也氏と杉浦康平氏が、審査委員の任期を全うされて昨年度限りで退任された。代わりに本年度よりアートディレクターの浅葉克己氏、作家の平野啓一郎氏が審査委員に就任された。そして今年の審査会は、昨年度参加された野町和嘉氏、笠原美智子氏に例年通り岡部あおみ氏、山岸享子氏、佐藤時啓によって 2 月に開催された。全国からノミネートされた資料を元に今年は例年よりもさらに活発な議論が展開されたと思う。その結果、全員の審査委員が納得できまた充実した受賞メンバーが決定したと言えよう。

さて 100 年前の明治 41 年、新天地を求めた日本からの移住者 781 名を乗せた笠戸丸が 2 ヶ月の航海の後に初めてブラジル、サントス港に入港した。本年は日本人ブラジル移住 100 周年を記念した、「日本ブラジル交流年」である。したがって本年の海外作家賞はブラジルから選ばれる事になった。本年は運営スタッフとして尽力いただいている高橋朗氏が調査に出発し、そして、美術館や画廊を中心として調査された。その結果、数名の候補者があがり、その中から、クラウス・ミッテルドルフ氏に海外作家賞を授与することとなった。

クラウス・ミッテルドルフ氏は 1953 年サンパウロ生まれ。ファッションや広告の写真家としてそのキャリアは長い。受賞対象となった写真集 THE LAST CRY は映画の一場面のようなシークエンスを多用し、叫び声を上げるモデルの一連の動きを撮影したものである。水の中で泳ぐ人や叫ぶ姿の一瞬の表情をとらえているが、近代的な自然の記録としての写真ではなく映画を制作するようなステージドフォトの技法で制作されている。その写真は泳ぐ人にまつわる水やモデルの表情が、接写したダイナミックな画面構成とともに瞬間が固定され悲しみや恐怖、驚きなどの普遍的な感情を描き出す。それはまるで映画『戦艦ポチョムキン』のオデッサ階段における乳母車の転落シーンを彷彿とさせるようだ。

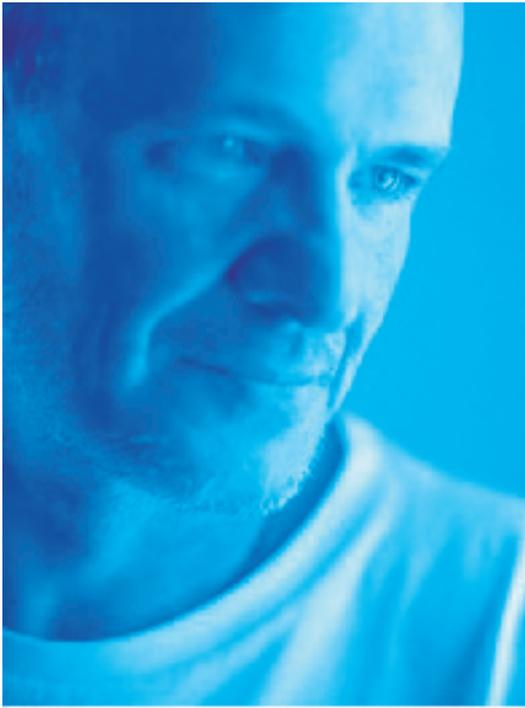
国内作家賞は檜橋朝子氏に決まった。97 年の「NU・E」、2003 年の「FUNICULI FUNICULA」に続く、近年続けていた水面ぎりぎりからの風景をまとめた 2007 年の「half awake and half asleep in the water」と同名のツアイト・フォトサロンにおける展覧会が受賞対象となった。日常の中の不確かな対象やフレームで切り取られる事によって見えてくる異物、特定のどこかではあり得ない匿名の風景を探し歩く旅を一貫して続けている。しかし今回のシリーズでは水の中から半分水面に配置した構図で写す事により、同じように日常的な日本中の風景を自身の風景として捉える事に成功した。水面からという独特な視点は不安定な異界としての都市を描き出した。その風景は平凡であればあるほど、檜橋の写真によって極めて新鮮な風景に置き換えられる。今回集大成としての檜橋ワールドはまさに写真芸術と呼べるものであり国内作家賞として相応しい。

新人作家賞は澤田知子氏に決定した。氏はすでに新人写真賞としての木村伊兵衛賞を2004年に受賞されている。その点について、機会を広げる意味からもあえて東川の新人作家賞には相応しく無いのではないかと議論もあった。しかしすでに4年が経過している事と、また海外での活動などその旺盛な活動を踏まえ、今再び東川から応援の意味で新人作家賞を授与することとなった。セルフポートレートは古典的なテーマであり、また自らを対象として作品化するアーティストも多い。その中でも澤田氏の執拗なまでの制作意欲やコスプレ的な作業量は群を抜いている。その作品群から現代の日本の社会状況を風刺的に読み取る事も出来よう。海外での活躍も含めて今後さらなる発展を期待したい。

特別賞は北海道に由来する活動に焦点をあてる賞であるが、本年度は「二月」という北海道の冬を対象にした写真集を出版した小畑雄嗣氏に決定した。スケートのイメージを骨格として雪の結晶が象徴的に配置されたこの写真集は美しい。他の季節に比べてもとりわけ冬という季節は北海道らしい。住人にとっては美しさを享受するよりは、生活と自然との闘争の面があるが、その厳しさの一瞬の神々しさを捕える事ができれば、それは美に変換され多くが観賞可能である。小畑氏は数年にわたるスケートなどの取材の間、雪の結晶に興味を覚え、撮影を試みる。そして苦勞の末にその姿を写真作品として捉える事に成功する。厳しい環境の中に写真家としての美の発見を試みる力量とまたその新鮮な視点は普遍性を持ち、道外からの特別賞となった。

東川賞審査委員 佐藤時啓

| 第24回東川賞《海外作家賞》"The Overseas Photographer Prize"



© Klaus Mitteldorf

シリーズ「THE LAST CRY」1998より

クラウス・ミッテルドルフ (Klaus MITTELDORF)
サンパウロ在住

1953年ブラジル、サンパウロ生まれ。1979年ブラズ・キューバス大学建築都市科卒業。卒業後より写真や映画に携わり、80年代よりファッションや広告写真の世界で活躍。ブラジルはもとよりヨーロッパでも高い評価を得ている。また、社会との関わりの中での写真表現に重きをおき、コンスタントに作品を発表している。

第24回東川賞《国内作家賞》 "The Domestic Photographer Prize"



©Asako Narahashi シリーズ「half awake and half asleep in the water」2007より

榎橋 朝子(ならはし・あさこ)
東京都在住

1959年東京生まれ。89年早稲田大学第二文学部美術専攻卒業。在学中よりカメラ誌『写真時代』が募った森山大道氏主催の「フォトセッション」に参加、グループ展や個展活動を開始する。90年、自身をふくめた作品発表のためのベースキャンプとして、個人ギャラリー「03 FOTOS」を開設。96年から2000年にかけて不定期刊行誌『main』10刊を石内都氏と共同発刊。日本の風景を独特な距離感で見つめた写真集『NU・E』(97年刊)、『フニクリフニクラ』(03年刊)を発表して注目を集める。受賞の対象となった作品「half awake and half asleep in the water」は、海や湖のゆるる水面にレンズの視点を合わせ水面下と水の上の光景をとらえたもので、「覚醒と眠りのはざまにゆだねた」、偶然に依拠する制作にいどむ作家の新境地への評価となった。本作品の写真集が米ナツラエリ・プレス社から昨年秋に出版され、海外からも高い評価を得ている。

第24回東川賞《新人賞》 "The New Photographer Prize"



© Tomoko Sawada

「ID400」 1998より

澤田 知子(さわだ・ともこ)
ニューヨーク在住

1977年神戸生まれ。成安造形大学写真クラス研究生を終了、現在同大学客員教授。定型化した肖像を量産する証明写真のブースで、同世代400人の様々な女性像を演じ表層を重視する現代社会への批評を「ID400」のでデビュー作にまとめ、2000年度キャノン写真新世紀特別賞を受賞した澤田氏は、04年に作家への登竜門として知られる木村伊兵衛写真賞、ニューヨーク国際写真センターの第20回年度賞ICP Infinity Award for Young Photographer 賞を受賞するなど、大型新人として内外の展覧を通してすでに世界的な注目を浴びてきた。

第24回東川賞《特別賞》"The Special Prize"



© Yuji Obata

シリーズ「二月」(Wintertale) 2007 より

小畑 雄嗣(おばた・ゆうじ)
東京都在住

1962年、神奈川県藤沢市生まれ。85年日大芸術学部写真学科卒業。出版社写真部勤務の後、建築写真家のアシスタントを経てフリーランスとして出発。企業誌、一般誌、広告等の依頼撮影のかたわら、単独取材による撮影を続けている。87年出版社勤務中に上海を撮った作品で太陽賞を受賞。97年コニカ奨励賞の資金でサハリンへ渡り、「見えざる国境」をまとめる。2001年ポルトガル、マデイラ島の美しい光の風景にみせられ写真集「Bird of Paradise: MADEIRA」を刊行。北海道の冬の原野に舞う雪の結晶、夜のリンクをスケートで疾走する少年達、白いウインターテールの幻想世界を描く写真集「二月」は、刊行とともに多くの人々の心をとらえた。